

カエルとガマの10月までい対談

カエル・ガマさん、ごぶさたしました。

ガマ・・・お久しぶりですね。

カエル・・・日本では、大震災、原発事故から7ヶ月、ほんとにきびしさが続きますね。

ガマ・・・夏休みにはイタリア政府や企業、NPOなどが、被災地の子供たちを招待してくれました。

カエル・・・はい、日本の子供たちに希望を、ぜひ力になりたいというプロジェクトでした。カエルもアシジに近いバーリの合同合宿にボランティアとして参加してきました。12人の子供たち、まるで<24の瞳>でした。

ガマ・・・多くの方々が避難生活を送っておられますが、全村避難の飯館村のこともアシジに聞こえていますか？

カエル・・・はい、原発事故による全村避難とは・・・言葉もありません。『地に足をつけてきた人々が地を追われる無念を思う』と天声人語(5/5)にもありました。“までい”の村ですね。

ガマ・・・『「食べ物はまだいにな」「子どもはまだいに育てるよ」「子どものしつけはまだいにやれよ」「玄関はまだいに掃いておけよ」じいちゃんが言った、ばあちゃんが言った、あの言葉・・・』(『までいの力より』)

カエル・・・“までい”とは、『丁寧なやること、手抜きをしないで最後まできちんと 手間ひま掛けること たっぴりと時間をかけて 心を込めて つつましく・・・』(『までいの力より』)

ガマ・・・その美しい飯館村の姿は『までいの力』(SEEDS出版)で見ることができます。1年数ヶ月もかけて編集されたこの本、『ここには2011年3月11日午後2時46分以前の美しい飯館村の姿があります』という急きょ刷られたページを加え、まえがきには『まさかこのような中で「までいの力」の発刊になるうとは』という菅野典雄村長の言葉も加えられて、4月11日に出版されています。

カエル・・・『今、飯館村は村誕生以来の危機に瀕している。いわゆる原発事故という目に見えない災害との戦いを強いられているのだ。不安と憤りは計り知れない。しかし、飯館村は負けてはいられない。・・・』菅野村長さんの言葉から“までい”のほんとうの力が伝わってきます。

ガマ・・・菅野村長は「までいライフ」の2つのメッセージを次のように言っておられます。『暮らし方を少し変えてみようではないかということ。大量生産、大量消費、大量廃棄によって作られてきた日本経済の中に少しスピードをゆるめてみる、もう一つは人と人のつながりを深めようということ。』

カエル・・・『・・・走っている人は歩く、歩いている人は立ち止まる、立ち止まっている人はしゃがんでみる。そうすると足元の花の美しさが見えてくるような気がする。・・・』村長さんの言葉は心に響きます。

ガマ・・・“までい”には、アシジのライフ、聖フランシスコのライフにつながるものがありますね。

カエル・・・はい、カエルもそう思います。バーリでの子供の言葉が思い出されます。「あのときは、すぐに竹藪に飛び込んだ。おじいさんの牛は無事だった。猫は1週間ぶりに帰ってきた。・・・大きくなったら、お父さんのアクセサリーの仕事か、お母さんの美容室のお仕事を継ぎたい・・・」大変な体験をした子供たちが、人と人のつながりを大切に、までいに育てられ、それぞれの夢と希望を実現していける・・・そんな社会をみなで作っていけるよう、よく祈り、よく考え、手を携えていきたいですね。

ガマ・・・平和を願い、主イエスの福音をまでいに生きた聖フランシスコのアシジにもうすぐ、ベネディクト16世が訪問されますね。

カエル・・・はい、大修道院の70名の兄弟たち、そして、街をあげて、みなでお迎えの準備をしています。次回の対談では、教皇さまのご訪問について分かち合えたいと思います。

カエル・ガマ・・・ロザリオをまでいにまさぐりながら、みなさまと共に祈ります。